

國學院大學學術情報リポジトリ

平田国学における靈魂觀の史的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 威朗, Kobayashi, Takero メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002405

平成二十六年九月

博士学位申請論文

「平田国学における霊魂観の史的考察」

國學院大學大学院

文学研究科

小林 威朗

本研究の目的は近世後期の国学者平田篤胤の学問・思想、とりわけ靈魂觀が、篤胤の学問を継承した神道家・国学者達によってどのように受容され、また変遷していったかを史料に基づいて考察することにある。本研究において「平田国学」とは、篤胤の学問・思想を中心として、私塾である気吹舎において出版された著作（あるいは写本）を通じて広まった学問・思想のみならず、それを受容した人々（門人帳に名前があるか否かは問わない）における靈魂觀とは、篤胤の靈魂觀を中心としてそれを受容した人々の言説を含むものとなる。この研究を通じて、これまで単に「平田派国学者」の勢力拡大から不遇への過程として捉えられてきた幕末から明治初年における平田国学を再考すると共に、神道史（神道思想史）における意義を明らかにすることが出来る。と考える。

これまで平田篤胤に関する研究や所謂「平田派国学者」を論じる研究には共通する問題点が指摘できる。それは執筆目的や時期が異なる著作を切り合わせて研究対象の思想として指摘できる。また「平田派国学者」を論じる際には、どこまでが篤胤の言説でどこからが研究対象のものなのか具体的に示されないまま論じられていく向きがある。このような方法に依って研究対象の一貫した思想を抽出することを目的とするならば意義あるものと思われるが、時期や条件の異なる著作から適宜言説を切り貼りすることでは研究対象の思想とする方法では、論者の恣意的操作が介入している。謂わざるを得ない。このように視点に立ったとき平成十三（二〇〇一）年より行われている国立歴史民俗博物館による平田神社伝来の平田篤胤関係資料の調査・公開は重要な意味を持つ。これまでも渡邊金造『平田篤胤研究』のように史料に基づく篤胤研究や、三木正太郎『平田篤胤の研究』のように一つ一つの著作に寄添って分析する研究があり、今日においても必読の書であることには変わりはない。しかし、平田篤胤関係資料の公開に依って、「気吹舎日記」や旅日記類、「金銀入覚帳」等が翻刻され、篤胤や鋏胤、延胤の行動や交友関係、気吹舎の状況等が詳細に示されるようになった。また、著作に付いても草稿本段階からの分析が可能となっており、両氏の研究の方向性が大きく深められる可能性が示されたのである。このような状況に鑑みて本研究では、日記や書簡などの史料に基づきながら著作成立年代を定めた上で

その分析を行う。そうすることで特定の著作が持つ意味内容が受容者にとってどのようなかを明らかにし、平田篤胤が持つ連続性の一端を示せるものと考えられる。このような目的意識の根底には、右の平田篤胤関係資料の調査・公開に尽力してきた宮地正人による次のような言及がある。

戦時中に教育を受けた世代においては、平田国学と聞くと、非合理主義、排外主義といったマイナス・イメージと条件反的に結合して意識され、生理的嫌悪感は覆うべくもなく強烈である。また常識化された理解では、戦前の国家神道そのものを創り出した張本人として、祭政一致・廃仏毀釈も含め平田国学が非難されつづけている。さらに、平田国学を自己の正当性主張の中にも位置づけて然るべき神社界自身も、現実には「敬して遠ざけており、学術的には本居宣長を強く押し出し、明治期では津和野国学を前面に据え、問題を糊塗している印象を私は強く受けている。」(宮地正人「気吹廼舎と四千の門弟たち」(『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』、平凡社、平成十六(二〇〇四)年)

宮地がいうところの「神社界」として妥当な範囲における平田篤胤の研究蓄積を示し、敬して遠ざけているわけではなく、と批判することもあるが、本質的な問題は、右の文言の裏を返せば、今までの「神社界」における平田篤胤研究は、平田篤胤や平田国学に対する「嫌悪感」を拭うまでには至らなかったという点である。このような言及は、平田神社に所蔵されていた史料を調査するに至るまでの経緯が関係している様に思われる。平田篤胤は平成十一(一九九九)年の中津川における平田国学者の史料調査を開始した二年後にあたる平成十三(二〇〇一)年十月に平田神社(米田晴江宮司)の六代目当主米田勝安夫妻を訪ね史料調査の許可を依頼している。その際に「神社側としては、いわれたいような史料非公開といった立場は、これ迄もとってきた訳ではない、しかし従来来た人々には、学会で著名な研究者も含めてだが、ちらっと見るだけで後が続かない、えらそうな論を張ってはいるが、史料を見ないで、よくいえるものだ、との厳しい釘が、しよっぱな学されたのであるが、史料を見ないで、よくいえるものだ、との厳しい釘が、しよっぱな学的研究」(『日本歴史』(宮地正人「平田国学の再検討―篤胤・鍊胤・延胤・盛胤文書の史料たこれまでの平田篤胤や平田国学の研究に対する意見―史料調査を許可する条件でもあらう)を示されている。つまり、右の引用で宮地が述べる「印象」は、これまで本格的な史

料調査をされてこなかった平田神社とその伝来史料という存在に裏付けされているのである。ここで「神社界」における平田篤胤研究あるいは、平田国学研究をまとめると次のようになろうか。时期的には、明治末年の明治版全集刊行（あるいは刊行準備段階）から村岡典嗣による篤胤研究が著わされる大正前期に一つの契機があったように思われる。それまでの篤胤に関する言説が、門人や没後門人による先人顕彰的なものであったのに対し、村岡により西洋哲学を用いた篤胤の学問・思想評価や年譜と著作を関連させて具体的な分析を行うという研究の深化があったように捉えられる。昭和戦中期の篤胤研究として山田孝雄や河野省三の著作があり、村岡の論を参照しているもの、戦中研究手法としては篤胤の学問の全体像を捉える、あるいは神道史における位置付けを述べたものであったといえよう。村岡の研究手法に近いものは、戦後の三木正太郎の論考を待たなければならぬ。「鬼神新論」については資料調査を行って篤胤の思想分析を行い新たな視点を示しているものの、キリスト教の影響については全集を用いての分析であったため村岡論を再考するものであったといえる。小林健三の研究にいたって村岡論の史料批判が行われ、板本『古史伝』（全集所収）ではなく、草稿本を用いる研究が著わされる。神保は史料批判という意味では『御一代略記』に記される著作成立に対して疑問を抱いているが、資料調査という面では小林健三を踏襲し、その他の篤胤著作引用では全集に依拠している。学問・思想の全体像を示すものや、神道史における篤胤の位置付けを検討するものが多いが、それを下支えするはずの具体的な思想・学問については、史資料にたいする批判的態度が乏しく篤胤の事跡については「御一代略記」以上の資料を用いることは少なかったし、篤胤の著述についても板本や全集に依拠してきたのである。このような認識に立脚して本論を「史的考察」とし、国立歴史民俗博物館で調査・公開されている「平田篤胤関係資料」に依拠しながらも、これまでの「神社界」の篤胤研究をはじめとした諸研究を参照しながら考察していきたい。本論が「靈魂観」と表記を限定している点について触れておきたい。戦前の「神社界」のある部分において「宗教的」な言説は忌避される存在であったが、このことは戦後においても変わらなかったと考える。このこと自身は昭和四十七（一九七二）年に阪本健一が「戦前、篤胤学は最後の妖怪学となった」と非難されたが、神道家、国学者があまり、

いな、ことさらさけて通った日本人の死生観について、今日もつとつきつめて考えることが必要であろう」（『神社新報』（昭和四十七（一九七二）年）後に、『明治維新と神道』（同朋舎、昭和五十六（一九八一）年）所収）と述べている状況と、今日の「神社界」における状況は全く変わっていないことを指摘しておきたい。篤胤にとつての「死生観」は神々に対する信心・信仰に依拠していたことは間違いない。「靈魂観」も「神霊」と「靈魂」とを同質と捉えていた（一章、二章参照）。つまり、篤胤の「古伝」理解に立脚した神々に対する信心・信仰を明らかにすることなくして、篤胤の「靈魂観」は示すことが出来ないのである。

以上のような問題意識に立脚して、本研究では第一部「平田篤胤の靈魂観と神職・国学者」、第二部「宣教使と平田国学の靈魂観」の二部構成にて論を進めた。まず、第一部「平田篤胤の靈魂観と神職・国学者」では『靈能真柱』と『古史伝』における篤胤の思想分析を行った上で、岡熊臣と六人部是香の神観・靈魂観を分析した。

第一章で行った『靈能真柱』の分析において、篤胤は本居宣長の「現世に影響を与えるミタマ」と「夜見に往くミタマ」という考えを一旦受容し、「霊」「魂」の語を当てて使い分けを試みていたことを示した。その上で、「夜見」ではなく「幽冥」という地上に存在する見えない世界に「魂の行方」を定め、「霊」「魂」が共に地上に存在することを説くことよって、「靈魂」の不滅を導いているとわかった。

第二章では『古史伝』の成立年代を限定した上で、草稿本から窺える思想形成過程を分析した。その中で、篤胤は産霊神の「御神徳」を「持分け」た神々によって世界・万物が生成された。人間もまた産霊神から「神魂」を授かるという神人関係・世界観を有していたとわかった。また、「青人草」を神々の「愛しみ」を受けける存在として捉えたことで、現実世界は「古史」神代巻の世界と同質のものとなり、大國主神の事跡を基準（目標）として、人間が如何に生きるべきかという指針（道徳的意味・意義）を「古史」の中に見出したところ篤胤の学問的特徴がある。この「古史」に基づく人間理解と大國主神理解に緊密な関係があるのが「死後審判」説であり、車の両輪の如きものであったと考えられる。このような「古史」解釈による世界生成や人間理解、「死後審判」説形成によつて、『靈能真柱』以来の靈魂観（幽冥論）を深化させたものが「帰天」説であったと言い得る。第三章では津和野藩において神葬祭運動を行う岡熊臣の著作と『靈能真柱』との比較を試みた。熊臣の著作である『霊の梁』を分析すると、熊臣は宣長の古事記理解から「神代」と現在の連続性」と「神の御霊と人の靈魂の相似性」を、篤胤の『靈能真柱』からは「人

の靈魂實在の普遍性」を受容したとわかった。これは神を祀る神職が、人間の死と靈魂を真劍に考え、人の靈魂を祀るといふことの理論を古典と両国学者の學問から導き出したものと考えられる。

第四章では六人部是香における『古史伝』の受容を確認し、『産須那社古傳抄』との比較を試みた。その結果、多くの共通点と大きな違いが確認されるが、相違点が重要であった。つまり、「現世の守護」と「没後の使令」という発想は両者に共通するが、『古史伝』では大國主神に『古傳抄』では「産須那神」にその職掌が付与されている。このことは『古史伝』が大國主神の事蹟のように辛苦に遭つてもくじけることなく徳行を積むという、謂わば生き様が主なる内容であつたのに対し、『古傳抄』は「産須那神」と「産須那社」の重要性を説いたために、いかに「心を竭す」かといういわば崇敬・信心が主たる問題となつている。

このように篤胤の靈魂觀を中心に學問・思想の変化を考えると、篤胤自身も宣長の説に依拠しながらも、そのまま受容するのではなく、自身の信仰・信念に符合する古傳の再解釈を行っている。そして、この古傳の再解釈は自身の學問が深まれば深まるほど刷新されるものなのである。このことは、二人の神職・國学者の平田國學受容からも見いだされる。つまり、篤胤の著作を受容しながら自説を形成しているのであつて、全くそのまま受容していないといふことである。これは両者が神職として自身の靈魂觀や「産須那神」に関する問題を古傳（古典）解釈によつて導き出したのであるからして、至極當然の事なのであるが、これまでの研究ではこのような神觀・靈魂觀を持つて「平田派國學者」という一括りの集團を形成し、その上で思想的立場が試みられてきた。このような客觀的で壯大な研究が無意味であるとは思わないが、本論の立場から見た場合の重要性は、自身の敬神・信心を古傳解釈によつて導き出した國學者がいて、その國學者の説を受容・進展させることによつて現實の問題に取り組んだ神職がいた、といふ事實なのである。

第二部「宣教使と平田國學の靈魂觀」では、明治初年の宣教使で活動した人物を中心に平田國學の神觀・靈魂觀がどのよう受容されてきたかを考察した。

第五章では宣教使期の教義確立問題について、矢野玄道の著作を位置付けながら概観した。その中で「神魂帰着」に関する議論が延胤等と小野述信という神祇官上層部を対立軸とする靈魂觀が採用されていた。また、直接的に宣教使での採用はなかったが、右の議論に

おける延胤擁護のために執筆されたのが矢野の『真木柱』であった。その後、様々な問題が宣教使の教官等（上層部を含まない）によって議論・決定されていくことになるが、その中の一つが所謂「豫美考証」である。この論争は霊魂観をすでに決定していた宣教使が、同時に平田流の世界観を採用されるかどうかという意味において重要な論争であった。中で宣教使の統一見解を示そうとしたのが『豫美考証』であり、最終的には気吹舎の公式見解として「太初玄運魂魄分属図説」が門人へ頒布されることとなる。第六節では、伊能穎則の学問を概観した上で、イギリス人宣教師ジョージ・エンソルの議論を分析した。エンソルの著書『神道破斥』は古事記日本書紀の信憑性や全知全能という神観の優位性を示すものである。これに対し穎則は記紀の信憑性については、天体説（地動説）受容や、近世期以来の記紀研究を基とした儒者との論争、さらに「御一新という現実を裏付ける「天壤無窮」の神勅（古伝）によって論証している。また、「全知全能」という神観については、天之御中主神の分魂と神々の分掌という神観に天地初発から「頭」「幽」を考える独特の幽顕論によってこの国の神のあり方を示している。その中で平田篤胤の学問、特に『古史伝』流の「古伝」解釈は、天之御中主神の御霊を産霊二柱神が分掌しさらに「五元神」に分掌していくという神観のなかに見いだされる。

第七章では、後に神道事務局生徒寮や皇典講究所などで教鞭をとる久保季茲について分析した。季茲は安政期に妹のてふが平田家に嫁いだ後に気吹舎へ出入りするようになり、慶応年間には延胤を学問的に補佐するまでになっただけで、明治二年頃の教導局では古史伝の内容が「教の大方」を示すよう命ぜられ、そこで見出される霊魂観・幽冥観では『古史伝』の内容から抽出される「神教」をもつて教導することを中心としていた。さらに、教導職期の『神教叢語』では、篤胤の霊魂観を引き受けながらも、行法（鎮魂）の重要性を説いていた。第八章では、近世期における堀秀成の学統意識を示した上で、宣教使における活動を位置付けた。その中で、秀成は富樫広蔭から学んだ音義説の影響が強く、この方法によって古事記を解釈している。これは、宣長が不可知としていたことを知らうとする、このように国学者をも採用して民衆教化にあたりながら、その方法を異にするものであつた。このよう

しろ当然のことであつたが、強引にであれ教義を確立し宣教使を船出させたところに平田
国学の成果があつたとも言ひ得る。このように宣教使からの視点に立脚した場合、平田国学の神観・靈魂観あるいは世界観
をみたときに、教義確立における重要な役割を果たしたといえよう。また、宣教使の目
的であるキリスト教からの防衛という観点でも、平田国学は全知全能の神に対抗しうる論
理を用意することによって一定の役割を担った。しかし、宣教使期の気吹舎という視点からはど
うであらうか。宣教使における同門の教員から考えれば、教義確立の問題は容易に決着が
くものと考へたであらうが、実際に門人達が有する「古伝」解釈は各人各様であり、統一
学的見解を示すには困難が生じた。これは真淵・宣長以来の「師説に泥まらず」という近世国
学の伝統が齎したものである。平田篤胤の学問・思想が、平田国学は古典研究の結果として導き出された「古伝へ
の信仰」を内包していた。そして、その最たるものが神観・靈魂観であつたといえる。こ
の信仰「を内包して」の「古伝」の信仰「を内包する」平田国学は、第一部で示したように、現
決するたための論理を神職達に与えていた。つまり、古典研究は平田国学を經由するこ
よつて、自身の信仰・信念に基づいて再解釈していくものとなる。だからこそ、第二部で
示したように、平田国学を基底とし自身の頭論を付加してキリスト教と対峙することが
出来たし、「豫美国論争」のようなものも起るのである。国学者として研究する対象で
ある古典（神典）を信仰するということの結果、平田国学自身が個別の信仰を有することにな
るのであつて、当然、一枚岩にはなり得ない。平田国学自身がそのことを体現することにな
なつたのが、明治維新の宣教使であつたのではないか。つまり、古典研究は平田国学によつ
て「教」の要素が付与されたのであるが、この「教」自身が多様な内包していたのであ
る。ここに平田国学が近世および明治初期の神道思想史において果たした役割の一端があ
あつたといえる。